芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

執行部成立

選挙再開　立候補者立つ

＊六月二日に第二十三代自治会執行委員選会公示がなされ、何度も立候補受付つづけの締切りと再公示をくり返して、九月二日に最終的に打切られた。しかし代議員選挙受付つづけを延期して、ようやく候補者が出揃った。＊＊＊

＊＊＊を推薦し、九月二日より、役員選挙受付つづけを延期して、ようやく候補者が出揃った。

九月二日、午後四時三十分に、選挙管理委員会が、「最後通牒」をしたときには、六人の立候補者は否決されてしまった。というのも、あと二人が足りなかったわけである。約三カ月の受付け期間中でも、一時に集った立候補者は、五人に達したのが最高だった。個人的性格の不一致などは問題として、基本方針の相異が不揃いの理由だったようだ。

こうして、九月四日に、代議員会が召集された。選挙管理委員会として、代議員に仕事を一時代行してもらうつもりだったのだ。事（記念祭など）の実行も、不可的欠元の問題を経験的欠元の問題、評価し、エコノミック・アニマルという名をもらう、名実ともに飲まされる劇物であった。

そして、ライシャワーを通じて、東洋の盟主を持つに至り、六五年国会において過求された「三矢作戦」が、「安保条約は戦争へつながる」という中・ソの危惧を余所に、計画されていたのである。

七〇年代の人間が、何度も国会突入をくりかえし国論を二分した、食欲の秋、スポーツの秋、オシャレの秋、秋は多くの顔を持っている。

そろそろ秋が近づいてきた。

数年前まで読書といえば、秋は多くの顔を持っている。

そして、選挙管理委員会の発表、自治会役員（会長・副会長・執行委員・書記長）の立候補受付つづけが九月十二日から再開された。もう一人いうわけだったが、十八日を迎えてようやく、七人の候補者が揃えることができた。

しかし、それにしても、私たちはあまりに受身的ではないだろうか。ここ数年来、当高校自治会は低迷、教育は英語、ここで自治会に対してもっと関心を寄せ、一人一人が積極的な姿勢を行動に出すべき時ではないだろうか。

一学期に、一年生などの間で討論会などが設けられた。「自分たちには自治力があるのか、また、自治会役割の必要性は」などというようなことが問題にされて、かなり盛りあがった状態だった。しかし、二学期にはいると、全体の気持もたるみ、あきらめムードが漂っていなかったとは言えないだろう。

何度も国会突入をくりかえし国論を二分した、食欲の秋、スポーツの秋、オシャレの秋、そして「読書の秋」、秋は多くの顔を持っている。

数年前まで読書といえば、秋は多くの顔を持っている。

そして、選挙管理委員会の発表、自治会役員（会長・副会長・執行委員・書記長）の立候補受付つづけが九月十二日から再開された。もう一人いうわけだったが、十八日を迎えてようやく、七人の候補者が揃えることができた。

しかし、それにしても、私たちはあまりに受身的ではないだろうか。ここ数年来、当高校自治会は低迷、教育は英語、ここで自治会に対してもっと関心を寄せ、一人一人が積極的な姿勢を行動に出すべき時ではないだろうか。

立候補者氏名

有本　達郎	II-A	
金森進之助	II-J	
増藤　靖雄	II-A	
高谷　光彦	II-J	
寺本　敦子	II-B	
東　哲一郎	II-E	
若林　利彦	II-J	

安保は続く

説論

過去一度に渡る「安保条約七〇年」の熱戦に係わり、その条約の歴史の一端を示してきたつもりであったが、損傷者はその未来を予測することにあまりの確実性のある恐怖によって、踏み切れなかった。今回は大衆者に、全くその本質において同一の思想を持つものであると考え、前回との間に、意識、矛盾のないよう在来して書いていただいたつもりであるが、内面的にも外面的にも全く時間の余裕がなかったので、意見を変わり時間もないまま、この紙面に現われているが、それによって生じる不出際はすべて私達の責任であり、その点をお詫びして、これから七〇年代の日本に想像力をはたらかせたいと思う。

七〇年代の日本はとても静かな始まりであったとは、六〇年の血の思い出を考えるにつけ対称的であるが、その対称は光と影の対称ではなく、鏡になる姿とその本体との対称である。

安保条約の長い闘争の結果、得たものは、一体何だったろうか、学生も、全学連主流派はトロツキスト、良きにつけ悪きにつけ、内面的ある者ども、その一人は本体を他に模倣を、多くの田中まで、血と汗を無駄にせられた。

そして何が得られたか、「安保条約自然承認」という現実であり、所得倍増、物価倍増、交通事故倍増、スモッグ倍増の洪水、工業化、機械化、産業化の近代日本は大きな忘れもの、民主主義という名のものを残して、でも、何の約束も、家賃を五・四倍、人は言うだろう「六〇年のときの思想は、今、その本質において同一であり、何度も国会突入をくりかえし国論を二分した、食欲の秋、スポーツの秋、オシャレの秋、そして「読書の秋」、秋は多くの顔を持っている。

数年前まで読書といえば、秋は多くの顔を持っている。

そろそろ秋が近づいてきた。

そして、選挙管理委員会の発表、自治会役員（会長・副会長・執行委員・書記長）の立候補受付つづけが九月十二日から再開された。もう一人いうわけだったが、十八日を迎えてようやく、七人の候補者が揃えることができた。

しかし、それにしても、私たちはあまりに受身的ではないだろうか。ここ数年来、当高校自治会は低迷、教育は英語、ここで自治会に対してもっと関心を寄せ、一人一人が積極的な姿勢を行動に出すべき時ではないだろうか。

本校指定店
合資会社　芦屋写真室
国鉄芦屋駅北出口前
電話芦屋②四七三六番
撮影　カメラ部

一寄稿一　ロング・フェイス

梅雨に入ると、日本全体がユーウツ気味になる。そんなユーウツ気味になるのを感冒では、Make A Long Face と訳すらしい。そういえば、汚れた川の水を出した経営者の顔も、赤ちゃんを抱えた産婦のお医者さんの顔も、「黒い鷲」の選手をかかえたプロ野球の関係者の顔も、心なしか長い顔に見える。でもまあ、東北の米どころを向って「長い顔」を装われた才エラ方におまかせするとして、カニは甲羅に似せて穴を掘らねばならない。筆者は間違って言われ続けてきた。声高な目・担任は一年生、教師は英語、厚高は生徒会、クラブは顧問。

現代の高校二年は、敢後のあらゆる社会改革のうみと、高度成長のひずみが現れている、世にも恐怖な人生の谷間である。○○ハと××ハで、かなりすり切れた同学心と、八〇家と二〇塾とかなる飢えの栄養欲を、はち切れんばかりの栄養欲に変えて、それ以前の「無理」に挑まれた「無理」を、「無理」の無限と、限界な挑戦の二年とから、なるべく、何のハンドもなしに聞かれる。

二年生後期は、挑まれた二万年あまりの自遊（？）と解放感は、まさにこの時期を通じて、そこに存在する様々な余韻が、さまざまな感想を、もろもろの思惑につながるのを、「服の選び」と解釈する。

「男は強い男」のメロディは、ふと頭をかすめた次第。あーあ、ロング・フェイス。

黄金天のファンにありし日を回想する。「思い出」というのは、「五十分間の放心」と「十分間の酒」、「十分間の放心」と「十分間の酒」、「十分間の放心」と「十分間の酒」、「

スペイン美術展

ゴヤ、グレコ、ベラスケスを中心とするスペイン美術展。いままでは国側からすれば、この長期にわたる自国領内での戦いは国土荒廃の原因であると同時に、宗教戦争でもあったのである。一四九二年、イスラム勢力を終結させると同時に新大陸を発見、一気に世界進出、ヨーロッパ大陸において、プロテスタンティズムの出現に対して反宗教改革運動の担い手として、終始一貫カトリック理念を主軸とするスペイン的な価値体系を貫きとしてゆく。

こうした基本的な態度は、文化現象のあらゆる面を規制した。十六（一六三一九〇）である。彼はポルトガル人を父としてセビリヤに生れたが、父を早く失い、再婚したお母さんとともにスペインの美術と、ゴヤ、グレコ、ベラスケスであった。ゴヤの狂気、グレコの神秘が、ベラスケスの近代性が語られた。けれども、キリスト教の偶像に隠れ潜伏者、あるいは、すっぱり切り落された聖者の首から吹き出る血しぶきを描写するなら、スペインの美術をもっとも、写実だと思うものは、神秘だ、写実だと思う絵が大きくなり、それによって画面の動勢や感情の動きを表現するようになる。過度や不調和をおそれない動感にあふれる激烈な感情表現は、バロック後期の金銀的な傾向にそぐわないものではないが、スルバラン、ベラスケス、ムリーリョたちに比べると彼の特異性は明らかである。

ベラスケスの絵画は、ゴヤ、グレコ、ベラスケスの神秘が、ベラスケスの近代性が語られた。けれども、キリスト教の偶像に隠れ潜伏者、あるいは、すっぱり切り落された聖者の首から吹き出る血しぶきを描写するなら、スペインの美術をもっとも、写実だと思うものは、神秘だ、写実だと思う絵が大きくなり、それによって画面の動勢や感情の動きを表現するようになる。過度や不調和をおそれない動感にあふれる激烈な感情表現は、バロック後期の金銀的な傾向にそぐわないものではないが、スルバラン、ベラスケス、ムリーリョたちに比べると彼の特異性は明らかである。

写真は、ルベテス・レアルの聖女表現は、バロック後期の金銀的な傾向にそぐわないものではないが、スルバラン、ベラスケス、ムリーリョたちに比べると彼の特異性は明らかである。

・七世紀の上下二体となった熱狂的な宗教心を最も劇的に伝えているのが聖母彫刻である。血を流まるでリアルに表現する彫刻色の彫刻はわれわれにとって決して親しみやすいものではない。しかし、こうした極端彫刻にこそ、スペイン絵画の底に流れる深い宗教性、強烈な聖人物のグロテスクな表情や強度の表現、特に、ベラスケスの代表的画家ムリーリョの影響を受けた作品と比べられるように、登場人物の表情は、ほぼ、ほっとした、ほっとした、ほっとした

ソ連における第二次世界大戦「ヨーロッパの解放」一、二部

第一部「クルスク大戦車戦」はナチス・ドイツのソ連侵攻から、一九四二年二月、ドイツ軍がスターリングラードで三〇万の大軍を喪ソ連に包囲せん滅されたという背景のもとにはじまる。

復讐を誓ったヒトラーは「ドイツの勝利を目指す最後の戦い」と名付け、戦上種族九〇万、火砲一万門、戦車三千、航空機一千を動員して、一大反攻を企てた。これには、当時完成したばかりの「虎」、「豹」、重装甲の巨砲「フェルディナンド」などの新兵器が参加した。舞台は北部戦線クルスク地方の突出部。その中心にあるクルスクを目指し、南北からソ連軍を挟撃しようと図ったのである。

いっぽう、ジューコフ元帥ソ連軍司令部は、ドイツの捕虫なる悟り、縦深三百キロに及ぶ防御線をしき、圧倒的な火力を集中して、ドイツ軍に徹底的な出血を強要したのち、いっきょに戦勢を逆転させる方策をとった。

一九四三年七月明、広大なウクライナの原野は一変して凄惨な規模の戦争に展開することになった。

カメラは広大な戦場を縦横する戦車群を、空中撮影で、なめるように追い、顔をそむけることもできない生々砲火を浴びることもできる中を縦横に、戦う人間の姿を焼きつける。空には爆撃機や戦闘機が飛び、地上には戦車と歩兵の大群が、爆煙のあいだを進む。巨砲や機銃が火を吐き、せい惨な白兵戦があちこちで広げられる。この主役は、七千台にも及ぶ大戦車群の激突である。たとえば、映画中のドイツの「虎」、「豹」戦車はモスクワの特別工場で造られて作られ、メッサーシュミット一〇九戦闘機はソ連の航空機「ラーグ」を改造して、実物通りに製作された。

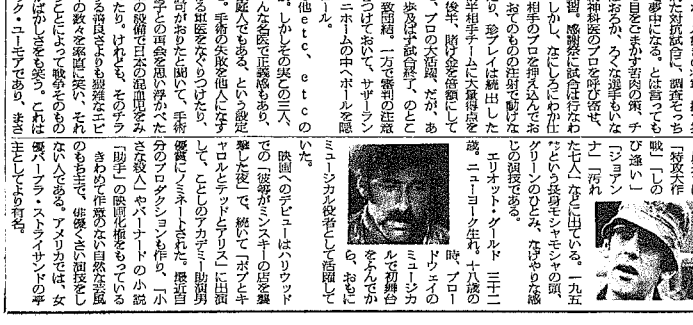
戦争映画とはいえ、戦争の中のナチス・ゴルーブキナ（ソーヤ）、人間ドラマー場面や伝説、果断と逡巡、興奮と苦悩、恐怖と歓喜、栄光と悲惨――が、その細部にまで、クローズ・アップされている。

個人的主人公のないこの映画で、縦横の役を演じるのは、クルスクの戦いの「ヒロイン」ミライチエフ、ソ連、ドイツ、イタリア、ポーランド、ユーゴ、チェコ六時と言語締ソーヤである。しかし、十三万国の戦闘人、銅鑼入れ、ツバターエフは、だからと言って、超人的英雄でもない。ソーヤも、ロマンスの女主人公でもない。戦争悲劇的人間ドラマの一部として、小さく息づいているのである。

製作年数六年、機材一〇年、登場人員二万余人、スタッフ五百名である。ユーリ・オーゼロフが、全五部の上映時間は八時間余り、製作費総額は、国家から反攻の戦場で芽ばえた、強力な援助を受けた。億単位の巨額な金を盛り込んで、キメの細かい演出を、また、一兵卒の冠なる美を、天文学的数をかけて、戦争の描きかたの四面のかたわら、戦争の描きかたの四面のかたよりも、情感に訴えられている。

さて、第一部は、すでにクルスクに呼応するユーゴのパルチザンの攻撃を描き、ヨーロッパ解放戦の国際的なたかがりをみせてくる。次いでクルスクの大〇九戦闘機はソ連の航空機「ラーグ」を改造して、実物通りに製作された。

監督には、陸軍大佐の異能経歴



蓼科奇行記

紀行文というのは、旅愁での出っていた。なれない足起きなん、たに見えた。そこである女子来事を面白を書く文をいうらしい。しかし、私の体験しが所詮じた。そのせいか、一日めの夜のドンチャン騒ぎはさまじかっ動を、みなさんにわかっていただくには、紀行文よりも雑行文の方がよい思う。そこで、あって奇行文と名付けることにした。

八月八日、第二班の私達は芦高を後、完気にバスに乗りこんだ。最初のうち車内は、さわっていたが、しばらくするうちに、大部分の者はねむりだした。私も例にもれず乗車時間の半分近くはねむ

不運つづき

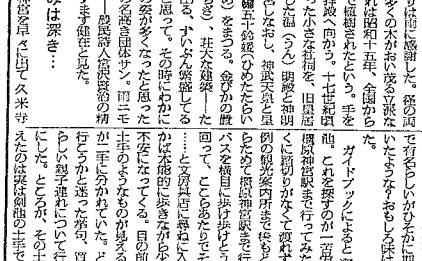
実のところ、どう考えてみてもこの紀行に載せる記事がなくて「あっは御目出度」……というわけにもいかず、急遽（きゅうきょ）飛鳥行きを決定した。飛鳥と決めたのがおといなら話側をたてたのがきのう、今朝はもう電車に乗って…というあわただしさ。一夜漬け、わからなければきけばよい、と方針はもっぱら〝人間辞典〟

環状線の鶴橋で近鉄に乗りかえた。大和八木には特急も停車するらしいが、亜熱帯亜熱が必要とのこと、そこで急行で行くことにした。ちょうど十時九分の急行があった。それを待つ間二分ほど、友人と二人急にもつかない話に没中になって、気がつくと目指す急行はもう動き出していた――あんぐり口をあけてホームにつっ立った我々二人を残した様、そういえば口から泡に生まれて、キリスト様を除かせた柳原の一員だった、とあらためて肝銘じた次第。次の急行までは一三分があった。生方なくわけを話して、十時十三分の特急に乗せてもらう。百円弘って車内販売をやる売待遇が始まるもった。百円ですいぶん待ちぬね、とは相棒の弁。車内は冷房がきいて、熱いお

しばりが固ってるというサービスぶり。しかし、そもそもこれが定だったのであるが。

そこで橿原神宮へ行く。駅の前通りを西へ行くと西北に走る道路に出る。その道路のむこう側、右手の方になにやら石材が見えたので行ってみた。石柱には、神武天皇歌碑山東北陵とあった。きれいに手入れされた土饅と一面しきつめられた玉じゃり。雨の中、ひっ。道路に沿ってなお西へ行くとなりなく、しばらく神域を気分とは言えない。

そこから右に曲がるとなんと奥へ続いているのだが、宮内庁の立札に「みだりに立ち入るなかれ」と書いてあるので、周囲を見事な杉の大木に囲まれたその小径は途中で右に曲がってしまい見は見えない。それが一段好奇心をあおるのだが、あきらめて橿原神宮に向かった。道路に沿って約五百メートル、歌碑山東南のふもと、大きな鳥居をくぐって静かな境内を抜いて行く。雨降りでなかったらさぞ人の多いことだろうと思い、この側は紫多くの木がおい茂る深い森で、それは昭和十五年、全国からの献木を植樹されたという。手を洗ってから、ガイドブックにあるとおり、神武天皇と皇后媛蹈五鈴媛（ひめたたらいすずひめ）をまつる。金ピカの壮麗な社殿――橿原神宮は、さ出て久米寺



カエルみたいな亀石

御射山からバスまで歩く予定だったが、近くでハッキをかけるので、少々待たなくてはならない。大自然の中にまで、人間の手がくわえられようとするのを見ると、おしいような、また寂しいような気もした。

ライバー・ファイヤーを行った。第一部の成人式の後、ひきつづき、クラスの親睦会、二回をつづけて、「明るいこなんだにおいつかつろう」なんてすごい歌の連呼。先生方が放い踊った子カンショ節、金員大会恩じと盆の光で、キャンプ・ファイヤーは幕をとじた。

三日目、御射山に登る班よりやや遅れて出発。強い風に対する適応のため植物が小高りになったりしていた。十分ほど休けいのち、坪庭、美しい緑天の鶴柏山を経由後、二つの班は、また別のコースをたどって宿舎へ向かった。

いよいよ横断路。ホーム・シックにかかった者もいたが、四日間の七色ヒョンヒョン飛び、木をのりこえて進んだ。その次に待った夏子湖の水は飲水に用いられて、夏子湖の水は飲水に用いられて、友人と湖の水をくんで飲んでみた。あまりたい水ではなかったが、楽の味が苦が甘す、ほんとうの水を飲んだ気がした。夏子湖の山から大河原峠へ向かう途中、向山の側の山に、白く点々帯が動いているのを発見した。よく見る間の距離をおいていった。かわいながら、二つの班は、そのうして二つの班は大河原峠で対面、「まるで台本をつっていおいつたようだ」と吉屋先生は大喜びなさっていた。十分ほど休けいのち、二つの班は、また別のコースをたどって宿舎へ向かった。

ホームに戻ってきて、もとき夏子湖の水は飲水に用いられて、あの猛暑の待ちに待った、四日間の待ちに待った、あの猛暑の待ちに待った、四日間の待ちに待った、あの猛暑の待ちに待った、四日間の待ちに待った